■ 特集 ■

難民の移動、わたしの移動
――去る者と残される者のはざまで――

片　　雪　蘭*

1. はじめに

2020 年から始まった世界的なパンデミックにより、人々の移動が止まった。特に、国境をまたぐ移動にはさまざまな制限がかかり、海外への観光や調査、出張が難しくなったことはいうまでもない。2021 年から移動制限が徐々に緩んできているものの、これまではパスポートのみで渡航できた国家でさえ、PCR 検査による陰性証明書、当局の水際対策に従うという誓約書、ワクチン接種証明書などの書類の提出が必須となった。このような書類を揃えるために数か月間の準備が必要になり、移動にかかる費用もコロナ禍前より増している。必要な書類が準備されたからといって確実に海外へ渡航できるのかというと、そうでもない。これまで国境を越えることに手間がかからなかった人々にとって、コロナ禍は移動の制限という点で過酷な状況であろう。しかしながら、世界にはコロナ禍前から海外への移動に航空券以外の費用をかけ、数か月間もしくは数年という間、査証や書類が発行されるまでひたすら待たざるを得ない人々がいることを忘れてはならない。

筆者は 2010 年からこれまで北インド・ダラムサラ（Dharamsala）に住むチベット難民について研究を行ってきた。難民のなかには無国籍者が多く、母国の政府からですら国民として認められていない人々が多い。その場合は、正式なパスポートの発行は難しい。庇護国が発行する旅行証があるとしても、身元確認が難しいという理由から、観光目的の海外渡航はほぼ不可能である。フィールドワークが必須である人類学的研究において、人類学者は「いつかは去る者」であり、現地のインフォーマントは「残される者」であることが多い。筆者は、ダラムサラを去る際、チベット人の友人から次のようなことをよく聞いた。「ソラン（筆者）は、自由に移動できていいね。私はここからいつ出られるのかな」と。そのような言葉を聞くと、筆者は自分が享受する自由を再確認するとともに、彼らに対して申し訳なさを感じていた。彼らを研究するために、人類学者である筆者はいつでも彼らを訪問することができるが、彼らは筆者のいるところに訪問することができない。筆者は、取得できた研究助成金によってある程度の制限はあるにせよ、自分の都合により移動することができた。このような移動の自由における非対称性によって、筆者は常に自分の発言や態度に気をつけなくてはならない状況に置かれていたのである。

本稿では筆者のフィールドワークで経験したいくつかのエピソードを紹介しながら、「移動できない人々について調査をすること」について一考することを目的とする。人類学者は、調査地に入

*関西学院大学先端社会研究所専任研究員

り、最終的には去って行くことが自然な流れである。自由に移動できない難民を調査対象とする人類学者が、現地でインフォーマントとどのように出会い、別れるのかに焦点を与えることによって、チベット難民にとって移動できないということが如何なることかについて検討する。

2. ヒマラヤを越える人々

チベット難民とは、1959 年 3 月にダライ・ラマ 14 世（以下、ダライ・ラマ）がインドへ亡命して以降、チベットから越境した人々を指す。チベット難民はインド、ネパール、ブータンの南アジア地域に最も多く、約 11 万人に及ぶ[1)]。そのなかから筆者が調査をしたところは、インドのヒマーチャル・プラデーシュ州に位置するダラムサラである。ダライ・ラマの邸宅やチベット亡命政府の敷地があり、チベット伝統舞踊学校やチベット医学研究所などがあることから、「チベット文化」が保存された「リトル・チベット」とも呼ばれるところだ。

長期調査を始めた 2015 年のダラムサラには、2000 年代初頭に越境した「新難民」が多く居住していた。2000 年代初頭のチベット本土では、インド行きが 10 代のあいだで流行り、特に教育の機会を求めて単身でインドへ渡った者が多い。「新難民」のなかには政治的な弾圧から逃れるためにインドへ亡命した人々もいる一方で、チベットの文化や歴史、英語を自由に学べるインドに対して憧れを抱いていた者が多かったのである。さらに、インドにおけるチベット難民学校は、チベットから直接越境してきた者に対して学費を免除し、生活費を支援する。チベットで経済的な事情により学校に行けなかった人、女性という理由で学校に行けなかった人にとっても、インドへの亡命はより良い未来のための 1 つの選択肢であったといえる。

いわゆる難民は移動を強いられた人々というステレオタイプがあるが、すべての難民が強制的に移動したとは言えない。チベット難民の場合は、前もってインドへ行く準備をすることが一般的だ。チベットからインドへの移動は険しい。教育的な理由で亡命した人々は主に 10 代後半でインド行きを決心するが、家族からは反対されることが多い。中国のパスポートを所持していないチベット人の場合、国境を越えるためには、ヒマラヤを越えるしかなく、これは命をかけた道のりだからである。それほど危険な道を 1 人で越えることはできない。数か月間、人々は案内人としてブローカーを雇い、同行者を集め、荷造りをする。準備が整うと、5 人から 30 人で構成されたグループでヒマラヤを徒歩で越える。チベットの首都ラサ（Lhasa）から、早ければ 2 週間、遅くても 1 か月でネパールの国境街に着く。そこからは車で移動し、ネパール・カトマンズにおけるチベット難民受け入れセンターに到着すると一安心だ。人々はネパールで書類手続きを終えた後、インドに無事入国することができ、事実上の難民として生きることになるのである。

チベット難民は、インドに対する憧れを抱いて越境するため、インドでどのような状況が待っているのか想像すらできなかったと述べる。無料で学校に行くことができ、ダライ・ラマに謁見できるダラムサラは、彼らにとって「いいところ」であった。もちろん、インドには表現の自由、教育

1）チベット亡命政府は、10 年ごとに人口調査をしており、最新の統計資料は 2009 年のものである。正確には、インドに 94,203 人、ネパールに 13,514 人、ブータンに 1,298 人が居住している。その他、ヨーロッパや北米、他のアジア諸国には 18,920 人が居住している（Planning Commission 2010）。

の自由、宗教の自由がある。しかし、自分たちがこれほど長い間、故郷に戻れず、インドから出られない状況になるとは思わなかったのである。

3. 移動ができないということ

ヒマラヤを徒歩で越えた時の経験を語る際、多くのチベット難民は涙を流す。道のりが険しく、危険に晒された経験から涙を流すのではない。インド到着後の生活が予想よりつらく、特に、いつ家族にまた会えるのか目途が立たないからだ。筆者が調査をした「新難民」、すなわち 2000 年代初頭に亡命した人々は、教育を目的にして越境した者が多い。そのため、ある程度の教育を受けた後は、故郷へ戻れると期待していた。しかしながら、そう簡単にはいかない。彼らは、いつインドから出られるのかわからないまま、10 年以上停滞の状態が続く。本章では、彼らにとって自由に移動できないということ、とりわけインドの外の世界へ行けないということがどのような意味なのかを明らかにする。

3.1. インドにおける「難民」

難民の生活を左右する最も重要な要素の 1 つは、受け入れ国の政策である。インドは、1951 年の難民条約、1954 年の無国籍者の地位に関する条約、1967 年の難民の地位に関する議定書のいずれにも加盟していない。独自の政策で難民を庇護しており、1960 年代以降、チベット、スリランカ、ミャンマー（ビルマ）、ブータン、アフガニスタン、バングラデシュからの難民を受け入れた。しかしながら、インドでは難民法が制定されておらず、チベット人の法的地位は外国人法（1946 年）で定められた「外国人」である。

パスポートや身分証明書といった書類は、近代国家と法制度が人を管理するために用いる代表的な手段として用いられてきた。特に、パスポートは移動を監視する手段であり、制度化された移動を生み出すために不可欠な役割を果たしている。トーピーが指摘するように、国家はパスポートによる正当な「移動の手段（means of movement）」を独占してきた（Torpey 2000）。パスポートを所持していない者の移動は、「違法」と分類され、犯罪者とされる。そして、どこの国からも国民として認められていない難民は、国家秩序からはみ出ている存在であるため、パスポートによる移動の制限がより厳しくなっているのである。

チベット難民は、インド国内における移動が自由である一方、国外への移動はそう簡単にはいかない。なかでも渡航がもっとも難しいところが、自分たちの故郷の「チベット」[2)]である。インドで生まれた難民 2 世や 3 世はもちろん、チベットから直接越境した新難民でさえ故郷へ戻ることは簡単ではない。さまざまな書類が必要であり、長い待ち時間が要求される。必要な書類を準備し、費用を払ったとしても、結局は渡航できないということもありうる。全てが不確実な世界のなかで、いつ、どのような方法で海外へ行けるのか、何も明確に決められないのが難民たちの状況なの

2）ここでのチベットは、中華人民共和国の行政区分としてのチベット自治区のみではなく、チベット人が自分たちの故郷だと考えているチベットを意味する。すなわち、チベット自治区に加えて青海省、四川省、甘粛省、雲南省の一部におけるチベット人居住地（中国語では、西蔵族自治県）も含む。

である。

3.2. グローバル時代における難民

世界各地の人々が多く集まる観光大国インド、そのなかでもダラムサラは観音菩薩の化身ダライ・ラマが暮らしていることで、多くの仏教徒やバックパッカーが長期滞在するところである。普通の難民キャンプとは異なり、外国人の出入りが自由な街だ。ダラムサラは気温も涼しく、ゲストハウスやレストランでは Wi-Fi も充実しているため、快適に過ごせる。道は常に人で溢れ、英語が流暢なチベット人たちは道やカフェで出会った外国人によく話しかける。ダラムサラでは、映画祭や音楽祭など様々なイベントが開かれ、チベット人若者たちが旅行者をパーティーに誘う様子を簡単に目にすることができる。旅行者の多くは、チベット難民が誰なのか、ダラムサラがどのような場所なのか、ある程度ガイドブックには書かれていても詳しく知らない。そのため、チベット人はよくチベットの歴史を説明し、自分たちの状況を伝える。

しかしながら、チベット人若者はよく外国人と交流し、英語が流暢であるため、時々海外の人から誤解されることがある。「比較的に自由で、経済的にも安定している難民」という誤解だ。チベット難民のなかには、自ら商売している人もいれば、外食する人もいる。毎晩、深酒をする人もいれば、外国人におごる人もいる。一見するとチベット難民は、メディアで見られるような「難民像」とかけ離れた人々である。「テレビで見るような難民キャンプを想像していたけど、意外と普通の街みたい」「みんな笑顔で難民だとは思えない」など、多くの旅行者は自分達がこれまで持っていた「難民像」とは異なる姿に戸惑うが、なかにはチベット人が置かれた状況を知らず、次のような発言をする人もいる。以下は、その際の会話である。

チベット人：私たちには故郷がない。
外国人：今の時代、故郷には何の意味もない。我々は皆グローバル市民ではないか。この地球上における全ての国が我々の故郷だ。
チベット人：戻れる場所があるからそんなこと言えるだけだ。

「地球上における全ての国が故郷だ」という言葉は、インドを放浪するバックパッカーたちからよく聞くありきたりのフレーズである。もちろん、彼らが悪意を持って、そのような発言をしたとは思えない。しかし、これらに対するチベット人たちの反応は、時には苦笑いをしながら無視し、時には興奮しながら自分たちの状況を理解してくれないと怒ることもある。チベット人にとってすべての国が故郷のはずがない。彼らの故郷は「チベット」のみである。そして、いつ行けるのかわからないところでもあるのだ。

ダラムサラは、バックパッカーやインド国内からの旅行者であふれる。まさにグローバル時代にふさわしい「観光地」といえるほどだ。そのような場所で、チベット難民は様々な文化に触れ、英語が流暢になる。また、難民学校のカリキュラムは、よく西洋近代的な概念、すなわち、非暴力／環境／平和／人権といった考え方を身につけることを目的としていることが多いため、チベット難民は西洋人との会話に詰まることが滅多にない。そのようなことから、チベット難民は「コスモポ

リタン」的であり、ダラムサラはコスモポリタン都市であるとも述べられている（クリストファー2020）。しかしながら、チベット難民たちにとってダラムサラは、どこにも行けないという事実をより際立たせる空間でもあるのだ。

3.3. 留まった身体／止まった時間

ダラムサラで出会ったチベット人のなかで、身体が1つの場所にずっと留まっていると、時間の流れを感じにくいと述べる友人がいた。以下は、その友人の語りである。

> *チベットにいた頃の自分が思い出せない。確かに、親と兄弟と暮らしながら、牧畜をしたことは覚えている。ただ、その時の自分がどのような人間であったかがよくわからない。多分、今チベットに帰っても、家族は私のことを覚えていないと思う。自分だけが違うところに住んでいるからね。自分が昔と変わったとは思うけど、全く変わってないとも思う。時間が止まったかのようにも思えるけど、自分の時間だけが進んだかのようにも思える。石になったような感じだ。*

どこにも行けず1か所に留まっていることで、チベット難民の多くは、「行き詰まり」を感じることが多いと答える。周りの多くの人々がダラムサラを行き来しているなかで、自分だけ1か所に留まっていると、時間も同じく止まったかのようだと語るのであった。ましてや経済的にも、社会的にも不安定な状態だとインド国内における行動範囲がとても狭くなり、一層行き詰まりを感じるのである。

難民は、非難民と比べてさまざまな制限がある。不動産を持つことはできず、いきなり路上で検問されることもある。また、市民権を持っていないため、大学の学位を持っている者でも企業への就職は難しい。そして何よりも不便なことが、移動が自由ではないという点である。チベット難民は、他の難民と比べて比較的に移動に関しては自由かも知れない。キャンプ内での移動のみが許される難民もいるからだ。チベット難民の場合、インド国内における移動が自由なだけ、運が良かったとも言える。しかし、ダラムサラのように世界各地からの人々が集まってくる空間だからこそ、自分たちの構造的な不自由さに行き詰まりを感じるのである。

多くのチベット難民は、先述したようにインドを「いいところ」として想像していた。これは、ダライ・ラマの存在が大きい。ダライ・ラマがいるところは、どこであれ聖地であり、彼らの亡命の道のりは、巡礼であった。「難民」が実際どのような状態なのか、正確に分かった上で越境を決めた人はいない。ダラムサラは、ダライ・ラマの恩恵があるところなのだから、むしろいいところに違いないと思われていた。しかしながら、多くのチベット難民はどこにも行けず、家族にも会えない歳月が10年も過ぎると、時間が止まったかのような感覚が芽生え、「行き詰まり」を感じるようになる。彼らは、最初から「難民である」わけではない。徐々に、時間が止まっていき、行き詰まりを感じることによって「難民になる」のである。

4.「去る者」と「残される者」

インドは、チベット人にとって安定した生活を保障してくれる国ではないにせよ、自分たちを受け入れてくれたありがたい国である。しかし、移動ができず、徐々に行き詰まりを感じることによって、海外への移住を願う人々が急激に増えるようになった。近年、合法のルートであれ、違法なルートであれ、欧米諸国への移住するチベット難民がだんだん増え続けているのである。彼らにとってチベットからインドへ亡命したことがより良い未来のための 1 つの道だったのと同様に、インドから海外へ渡航するということは「成功」を意味している。チベット人は、道で知り合いに会うと、カジュアルに「カワ？（どこ行くの？）」と聞く。すると相手はしばしば「これからアメリカだ」「チベットに戻る」というような返事を返す。フィールドワークを始めたばかりの筆者は、冗談だとは思わず、友人が実際これからアメリカに行くのだと勘違いしたこともある。それほど海外への移住に託する希望は大きい。本章では、チベット難民がどのような方法を用いて海外へ移住するのか、インドに残された人々は、インドを去る者に対してどのような想いを抱いているのかについて述べたい。

4.1. 2 つのパスポート、3 つの選択

難民が滞在する庇護国の政策によって事情は異なるものの、チベット難民の場合はパスポートに準ずる旅行証がある。インド政府が発行する「身分証明書」と中国政府が発行する「旅行証」である（図 1 参照）。インドに滞在できるチベット難民であれば、ほとんどの場合、問題なく身分証明書の発行が可能である一方、中国の旅行証はチベット本土から直接越境した人々にのみ発行される。

チベット難民は、所持する書類によって移動できる方法が 3 つある。まず、身分証明書は、チベット難民の海外への移動を可能にするために発行されるもので、一般的なパスポートのように冊子型である。しかしながら、当然インド国民に発行されるパスポートとは異なる。インド政府が発行した旅行証ではあるものの、インド国民がノービザで渡航できる国家へは行けない。また、観光目的で査証を発給することもできない。学術的・宗教的・公的な目的での査証発給のみが可能である。例えば、インド国内の大学で博士課程にいるチベット難民が、国際学会に参加することは可能だ。ただ、身分証明書は正式なパスポートではないため、査証発給のための提出書類が多く、特に学会主催校からのインビテーション・レターなどが必要だ。要するに、チベット難民のなかでも大学生や NGO のスタッフ、僧侶といった身元が明確で、かつ身元を確認してくれる渡航先の機関や個人がある者のみが海外へ渡航することが可能である。

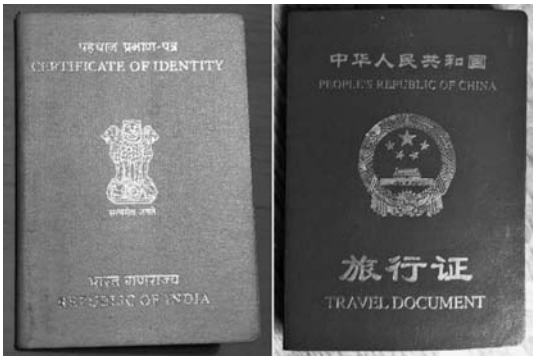

図 1　インド政府発行の身分証明書（左）／
中国政府発行の旅行証（右）

次に、中国の旅行証はチベット本土への帰還のみが許されるものだ。チベット本土に戸籍が残っており、身元確認をしてくれる家族がいる人であれば、申請することができる。すなわち、旅行証はチベット本土から越境してきた者に限られており、インド生まれのチベット難民は申請不可である。新難民の一部の人々がこの旅行証を申請し、チベットへ帰還することがある。ただ、政治犯だった者や政治犯の家族、インドでチベット独立運動に加担した者は、監視される恐れがあるため、申請することがない。また、どのような基準で審査されているのかも不明であるため、申請した全員に対して旅行証が発行されるとは限らない。

このように、チベット難民はインド政府が発行する身分証明書と中国政府が発行する旅行証を用いて、海外への移住とチベットへの帰還を選択する。ただ、すでに触れたように、チベットへ帰還できる者はチベットで生まれた者に限る。また、インドの身分証明書を用いて海外渡航ができる者は、ある程度海外に社会的ネットワークを持っているか、高学歴エリート層である場合が多い。ところがチベット難民のなかには、身元確認が難しいため、身分証明書の発行すら難しい者も多数いる。そのような場合は、正式なルートで渡航することはできない。そこで、3 つ目の方法となるのが、偽造のパスポートを製作することである。違法であるため、危険であり、手数料もかなり高額だ。偽造パスポートを使ったことが空港で発覚し、インドに送還されるチベット難民も毎年発生する。それでも、彼らは危険な方法を選択するしかない状況に置かれている。インドでの生活は、「外国人」という法的地位により、すべてが不確実であるからだ。

4.2. 「別れ」という日常

海外への移住を願う人々が増え続けるなか、筆者はフィールドワークをした 2015 年から 2017 年にかけて、数多くの送別会に参加した。チベット人の流出人口数について正確な統計はないが、およそ毎年 3,000 人のチベット人がインドを出てチベットへ帰還するか海外へ移住すると推測される。実際、ダラムサラは「インターナショナル・エアポート」というあだ名がつくほど、人々の往来が激しいのである。

しかしながら、ダラムサラを去る者もいれば、ダラムサラに残される者もいる。誰もがインドを自由に出られるわけではないので、海外へ渡航できることは自慢話のネタにもなる。どこの国へ行くのかによって腹の探り合いになることもあり、インドのビールとウイスキーが欠かせない送別会において、主役の渡航先について悪口を言った者と喧嘩になることもしばしば起きる。さらに、なかにはダラムサラに残された最後の 1 人になりたくないと思う人もおり、時々自分の境遇を嘆く人もいる。残された者たちにとって送別会は、二度と会えないかもしれない友人との最後の宴会であり、友人のより良い未来を願ってあげるところである一方で、嫉妬や不安、虚しさが錯綜するところでもあるのである。以下は、送別会によく参加していたインフォーマントの語りだ。

> *ダラムサラにいるとみんなが去っていく。最後の 1 人にはなりたくない。ソラン（筆者）が次にダラムサラに来るときには、誰も残っていないかもしれないな。*

> *昔は友達とよく仲良く過ごしていたけど、みんなダラムサラを去っていくから、だんだん人付*

き合いが辛い。ここを去ったら、またいつ会えるかわからない。だから、去っていく人に対してはあまり本音の話はしなくなる。

難民たちにとって、「別れ」は日常である。多くの難民が次々とダラムサラを去って行くからだ。送別会では、「またいつか会おう」という言葉もあえて言わない。非現実的なことであることを皆知っているのである。

問題は、筆者自身もいつかは去る者であるということだ。筆者がいつかインドを去り、日本に戻っていくことを誰もが知っている。上記の言葉は、まるで筆者に語りかけているかのようだった。多くのチベット難民は、筆者に対して「前世からのつながりによって、ここダラムサラで会えたのだ」とよく述べ、家族のように接してくれた。彼らと生活を共にしながら、彼らの考えや日常を共有してくれたことに対して、感謝の気持ちは一生忘れられないだろう。しかしながら、上記のような言葉を聞いた途端、〈彼ら〉と〈わたし〉の境界が明確に見えてくるのであった。なかには筆者をいつかは去ってゆく外部者として捉え、あまり自分の話を語ってくれない者ももちろんながらいた。人との別れが日常になっているダラムサラにおいて、急に現れては去って行く他の外国人のように、人類学者としての筆者を快く思わない人もいたに違いない。

人類学者は、フィールドに赴き、去っていく。多くの場合、海外に去っていくのであろう。ということは、人類学者は「国籍」を持っており、「パスポート」を持っていることによって研究が可能である。J. クリフォードと G. マーカスが『文化を書く』（1996［1986］）で述べたように、調査する側とされる側の間には常に非対称的な権力関係が存在するのであり、「国民／非国民」、「移動ができる者／移動できない者」という構造は、難民を研究するにあたって避けることはできない。現地のすべての人々と親密な関係を保つことに執着していたフィールドワーク初期の頃は、このような問題についてどう対処した良いのか何度も悩まされた。もちろん、全てのチベット人が上記のように嘆くわけではない。ほとんどの人々は、ときには楽しく、ときには希望に溢れる日常を過ごしている。それでも、〈彼ら〉と〈わたし〉の境界は、急に予期せぬところで立ち現れるのであった。

5. おわりに

コロナ禍によって自由に移動ができないなか、筆者は時が止まったかのような感覚を何回も感じたことがある。2020 年が何回もループされているかのようだった。もちろん何かしら仕事はしている。時間が流れていることも承知している。しかし、「自分」の時間は止まったかのような感覚がどうしても消えず、コロナ禍が収束したら全世界が同時にもう一度 2020 年からやり直してほしいと思った。身体が 1 つの場所に固定され、忘年会や正月の祝いなど、当たり前のように行っていた母国の家族や友人との通過儀礼が途切れてしまったことは、思ったより影響が大きかったのだろう。

チベット難民は、今の我々のような状況が 10 年以上続いてきたのだといえる。もちろん、筆者は彼らが自由に移動できず、海外へ観光もできない状況であることが頭では理解できていたが、移

動できないということがどのようなことなのかを理解できたのは、コロナ禍になってからかもしれない。コロナ禍が始まって間もない時、ダラムサラにいるチベット人とビデオ通話をしたことがあった。筆者は何気なく「帰省もできないし、家族にも会えなくて辛い」と述べたことがある。それに対して、「僕たちは 10 年以上その状況だから、コロナ禍だからといって何か大きく変わったことはない。ダラムサラに人が少ないだけだ」と言われ、衝撃を受けた。「グローバル市民だから故郷は必要ない」と述べた観光客と変わらないと自分の無神経さを反省したものだ。

初めてのフィールドワークで聞いた彼らの言葉やエピソードが、当時は何気なく聞き流していたことでも、数年経った後にふとよみがえり、再解釈されることがある。「石」になったようだという友人の言葉も、当時はそれほど深く考えることができなかった。それが、今のコロナ禍になって、何回も思い出す。彼らにとって身体を動かし、どこかに移動するということは時間が流れることであるかもしれない。すなわち、移動ができるということは、他の人と同じく時計が動いているという意味でもあるのだ。難民の多くが欧米諸国へ移住し、「普通」のように生活したいと願っていることは、時計を動かすためだったのである。

送別会で出会ったインフォーマントが述べたように、実際多くのチベット人がダラムサラを去った。筆者と特に親密な関係にいた人々も、フランスやアメリカ、オーストラリア、日本などあらゆる国へ移住した。その国の永住権を取得しない以上、数年は移動ができない日々が続くものの、いつまで待てばいいかは予想できる。すなわち、具体的に未来を計画することができるようになることを意味する。いつパスポートがもらえるのか、いつ故郷の家族と会えるのか、いつ海外にいる友人に会えるのかなどの「普通」の計画だ。そのことを、筆者は長期のフィールドワークを終えて 3 年後のコロナ禍で理解することができたのである。時間は誰にでも平等だと言われるが、時間は平等ではない。各々の状況によって時間の速度やリズムは異なる。調査する側と調査される側の時間も当然ながら異なっている。難民は自由に移動できず、「待つこと」が強いられる。そのことを筆者だけではなく、多くの人々がこのコロナ禍で理解できただろう。フィールドワークとは、このように異なる時間の流れにある〈彼ら〉と〈わたし〉が、同じ速度ではなくても、テンポを合わせようと試みることではないだろうか。そう考えると、フィールドを去った後にも〈彼ら〉の世界を垣間見ることができるはずである。

付記

本稿の事例は、一部自著（片 2020）から抜粋したものである。

参考文献

クリストファー，S., 2020,「ダラムサラにおけるチベット人とトライブのアイデンティティをめぐる相互依存と排除」山岸哲也・顔行一訳『人文学報』516-2：115-140.

クリフォード，J.・マーカス，G., 1996［1986］，春日直樹ほか訳『文化を書く』紀伊國屋書店.

Planning Commission, 2010, *Demographic Survey of Tibetans in Exile-2009*, Central Tibetan Administration.

片雪蘭，2020,『不確実な世界に生きる難民――北インド・ダラムサラにおけるチベット難民の仲間関係と生計戦略の民族誌』大阪大学出版会.

Torpey, J., 2000, *The Invention of the Passport. Surveillance : Citizenship and the State*, Cambridge University Press.